十勝毎日新聞
2023年(令和5年)4月12日(水曜日)　(12)

ハクガンの剥製 町立博物館展示

【浦幌】ハクガンの剥製1体が、浦幌町立博物館の常設展示室に設置されている。

この個体は2019年に町豊北で死骸で見つかり、剥製に加工されて十勝川インフォメーションセンター（帯広市大通北2）で展示されていた。同センターが改修のため長期休館となったため、センターに寄贈した日本野鳥の会十勝支部が同博物館に移すことにした。

浦幌町立博物館に設置された「ハクガン」の剥製

ハクガンは、環境省レッドリスト（絶滅危惧IA類（ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの））に指定されている。浦幌では1991年春に1羽の飛来が初めて確認され、その後は増え続け今年3月には1500羽超となっている。

剥製は、全体が灰褐色でくちばしと足が黒いことから幼鳥とされる。同館の持田誠学芸員は「ハクガンの剥製を展示している博物館は道内では少ないと思われる。野外で生きている姿を見た後に、じっくり観察したい方は、ぜひ立ち寄って」と話している。

入館無料。午前10時～午後6時。休館日は月曜と祝日の翌日など。問い合わせは同博物館（015・576・2009）へ。

（円子紳一通信員）

北海道新聞（夕刊）
023年（令和5年）4月14日（金曜日）　十勝　2

原生花園の花 多彩な姿 浦幌

浦幌町立博物館の特別展示ホールで、町内の農業、岡田愛啓さん(74)が町内の豊北原生花園の花をテーマにした写真展を開いている＝写真＝。

３年間で撮った58種91点が並ぶ。「海岸にこんなに花があるんだ」と開花時期の５～９月、月に数回は通った。納得がいく写真を撮れるまで一つの花に数時間粘ることも。開花時期の短いオニユリや、３～５ミリの小さな花を咲かせるウスベニツメクサ、葉の影に隠れるスズランのつぼみや種などを写真に収めており、同博物館の持田誠学芸員も「良く見ているな」と感心する。原生花園の植物は250種はあるとされ、岡田さんは「まだまだあるから今年も通いたい」と話す。

23日まで。25日～５月23日は上浦幌公民館、５月25日～６月21日は常室ラボでも展示する。

（小久保友香）

十勝毎日新聞
(9)　2023年（令和5年）5月5日（金曜日）　（第3種郵便物認可）

ウラホロイチゲ 薄紅の「花」観察

博物館移動講座

【浦幌】浦幌町立博物館の移動講座「ウラホロイチゲ観察会」が4月29日、町内の自生地2カ所で開かれた。

今年のウラホロイチゲは4月中旬頃に開花の最盛期を迎えたため、この日は丘の北側にある生育地を訪ねた。

管内外から20人が参加。町内の植物研究家、坂下禮子さんが案内役を務めた。坂下さんは「ウラホロイチゲの花びらに見えるのはがく片で5～8枚」などと特徴を説明し、「もっと多いのも探して」と呼び掛けた。アズマイチゲとの違いも解説した。

参加者は花びらを数え、羽状に切れ込んでいる小葉を観察し、淡いピンク色のつぼみに「かわいい」と声を上げた。

がく片が10枚の花を見つけた豊頃町の池田守さん(71)は「毎年参加しているが、初めて見つけた」と喜び、坂下さんも「私も初めて見た」と驚いていた。

（円子紳一通信員）

ウラホロイチゲを観察する参加者たち

十勝毎日新聞
(15)　2023年(令和5年)5月10日(水曜日)

歴史が詰まった郷土資料読んで

博物館講座

講演した小林さん

【浦幌】浦幌町立博物館は4月30日の「図書館記念日」に、今年のテーマ「地域資料（郷土資料）」にちなんだ講座「地域資料はおもしろい！」を同館ロビーで開いた。

町内外から17人が受講。大津・十勝川学会の20周年記念誌「十勝川物語　歴史・文化・くらし」の執筆者の一人で、フリーランス・ライターの小林志歩さん（北海道民族学会会員）を講師に招いた。

小林さんは、地域資料には自分史、古老座談会の記録などがあり「リアルでよくぞ書いておいてくださった」とし、「十勝川物語」に掲載した広尾町史（1960年）にも登場するアイヌ民族の古老・広尾又吉と、坂本直行とのヒグマに関する会話（「雪原の足あと」坂本直行・65年）などを紹介した。

浦幌町の地域資料としては「浦幌村五十年沿革史」（49年）や「稲穂開70周年記念誌」（68年）などを紹介。「厚内川で『ヤ○○○○ギ』をタモですくった」など「浦幌町百年史」（99年）を引用した郷土史クイズの出題もあった。

小林さんは浦幌村五十年沿革史について「早い時期に作られ、当時の人たちの心意気を感じる」と評し、「地域資料には歴史が詰まっているので、ぜひ読んで」と勧めた。

ロビーには、大樹町の長谷川彩さんが主宰する移動書店「月のうらがわ書店」が開店し、「十勝川物語」など多彩な本が並び盛況だった。（田子紳一通信員）

北海道新聞　'23.5.12.(17)

アイヌ民族副葬品に保存処理

浦幌町立博物館　専門業者へ委託

【浦幌】町立博物館は16日、北大と東大から旧浦幌アイヌ協会（現ラポロアイヌネイション）に返還されたアイヌ民族の遺骨の副葬品5件を仙台市内の専門業者に預け、一定の時間を掛けて脱塩などの長期保存処理を施す。処理後は展示を予定している。

対象の副葬品はエムシ（太刀）4件とマキリ（小刀）1件で、いずれも劣化が激しい。5件の返還年は北大が2017年、東大は20年。返還後に同協会が町立博物館に寄贈し、同館の収蔵庫で保管されてきた。

持田誠学芸員は「これらの副葬品は製作年代や用途など、詳しいことが分からない。そうした調査研究を今後行うためにも処理は重要」と話している。

専門業者に委託して長期保存処理を施すことになった副葬品

同館は昨年度から、副葬品の劣化防止と長期保存の処理を業者に委託して進めている。（椎名宏智）

十勝毎日新聞
2023年(令和5年)5月15日(月曜日)(12)

原生花園、100年後も

浦幌・豊北 環境省の調査地点に

【浦幌】浦幌町立博物館が植物の月例調査観察会を行っている同町内の「豊北原生花園」が3月、環境省の「モニタリングサイト1000里地」サイトに登録された。同館による今後の調査結果は、同省の生物多様性センターに提供する。

19日には同館で「モニタリングサイト1000と豊北海岸」と題した夜学講座が行われ、同館の持田誠学芸員が同サイトの趣旨や登録の意義を解説した。

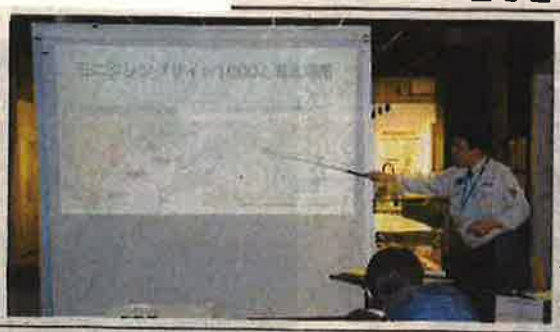
持田学芸員は「モニタリングサイト1000とは、今後100年間、同じ場所を同じ方法で調査し、生物相の変化を記録する試み。植物はたくさんの種類があり、環境変化を捉える指標になる」と話した。

また、豊北海岸には道レッドデータブックで準絶滅危惧種に掲載されているハマハナヤスリが生育していて、その保全のための継続観察の重要性を指摘。「十勝の自然を次世代に伝えるために、私たち一人一人の取り組みが重要」と強調した。

同サイトへの登録に当たっては「自然を見る目を育てる、自然観を養うなど学校教育との連携強化を目指す」とし、「ぜひ多くの人が地域の自然の変化を記録する仕事に関わってほしい」と月例調査観察会への参加を呼び掛けている。

観察会は5～11月の第1土曜日の午前9時～正午に行われる。博物館集合。問い合わせは同館（015・576・2009）へ。

（円子紳一通信員）



持田学芸員（右奥）の説明を聞く参加者

十勝毎日新聞
2023年(令和5年)5月16日(火曜日)(10)

浦幌炭鉱の名残学ぶ

博物館講座 住居や鉄橋跡たどる

【浦幌】浦幌町立博物館の移動講座「知っとこ！うらほろ『浦幌炭鉱跡地と常室一帯』」が4日、現地を巡って開かれた。町内外から11人が参加。同館の持田誠学芸員が講師を務めた。

十勝で唯一の炭鉱跡で、屋上に樹木が生い茂る廃虚と化した2階建てアパート、尺別炭鉱に石炭を運んだ電車が通った鉄橋跡、硫黄臭のする冷泉が湧き出ている排気口などを見学した。

常室地区周辺では、炭鉱と浦幌市街を結ぶ馬車鉄道跡である通称「千間道路」や、山際では工事が難航するなどし完成しなかった鉄道床盛り土を観察。旧常室小学校跡地（現常室ラボ）に建つ石碑「浦幌町教育発祥の地」も訪れた。

初めて浦幌炭鉱跡地を訪れた帯広市の40代女性は「植林された木も太く、地図や解説がなければ、この山奥に3600人もの人が暮らすまちがあったとは想像すらできない。語り継いでいってほしい」と話していた。

（円子紳一通信員）

鉄橋跡付近で説明する持田学芸員（左）

十勝毎日新聞
2023年（令和5年）5月23日（火曜日）（17）（第3種郵便物認可）

豊北海岸「多様な植生」

「モニ1000」登録後 初の調査会

砂浜で調査する持田学芸員（中央）と参加者

【浦幌・豊頃】今年度1回目となる浦幌町立博物館の月例調査観察会「豊北植物調査会」が6日、浦幌、豊頃両町にまたがる豊北海岸で開かれた。

同調査会は2015年から開催し、今年度から環境省の「モニタリングサイト1000里地（モニ1000）」サイトに登録された。この日は町内外から5人が参加。豊北海岸にあるトーチカ付近から浦幌川右岸堤防付近までの約2キロを植生に基づいて6区間に分け、種名、花・実の有無を調査記録用紙に記入した。

ツルキジムシロやフデリンドウなど17科27種類が確認された。このうち葉だけのものを除き12科14種類がモニ1000に報告される。指導した同館の持田誠学芸員は「調査ルートを区切ったことで、同じ豊北海岸でも多様な環境で成り立っていることを実感した」と話している。

月例調査観察会は11月までの第1土曜日、午前9時～正午に行われる。博物館集合。問い合わせは同館（015・576・2009）へ。（円子紳一通信員）

十勝毎日新聞
2023年（令和5年）7月12日（水曜日）（16）

新任教職員ら浦幌学ぶ

自然や史跡などを見学

【浦幌】浦幌町教職員ふるさと移動研修会（町教育委員会主催）が6月27日、町内の下浦幌地区などを巡回して開かれた。この春に着任した教職員や町職員ら20人が参加。浦幌町が展開する「うらほろスタイル教育」や、学習素材にもなる町内の自然、史跡について理解を深めた。

町立博物館の持田誠学芸員が、浦幌発祥の地や豊北原生花園などを紹介し、十勝うらほろ樂舎の本間悠資さん（うらほろスタイル推進事業コーディネーター）が、うらほろスタイル教育について解説した。

浦幌発祥の地で説明する持田学芸員（右手前）

参加者は、浦幌発祥の地や生剛（せいごう）村の初期の入植位置を記した文化財標識などで町の成り立ちを知り、豊北原生花園では自生している高山植物のコケモモなどを観察。北海道指定史跡の十勝太河岸段丘遺跡、1945年に空襲があった厚内駅なども訪れた。同行した佐藤亘教育次長は「見て聞いて体験することで子どもに伝わる。浦幌を知ってほしい」と話した。（円子紳一通信員）

次代に継ぐ 戦禍の記憶

弾痕が残るタンス 熱で溶けたガラス…

本別空襲の猛威まざまざ

【本別】78年前の本別空襲を語り継ぐ企画展が、町歴史民俗資料館（田野美妃館長）で開かれている。今回は400人近くが犠牲となった根室空襲を伝えるパネルを初展示。二つの空襲を通じて命と平和の尊さを訴える。

町資料館で企画展 「根室」も初展示

根室空襲で被害を受けた市街地の様子を撮影したパネル

企画展は町教委主催で25回目。根室空襲の展示は「根室市歴史と自然の資料館」の協力で実現した。

同空襲は1945年（昭和20年）7月14、15日の2日間で米軍機120機が来襲。港や市街地などを焼き尽くした。会場には空爆後の街並みを撮影したパネルなど22点を展示。1点ごとに、根室空襲研究会が当時を知る市民から丹念に聞き取った被害の様子を記したメモが添えられている。

ガラスの塊（手前）や唐箕（奥）など、本別空襲に関する資料が並ぶ企画展

本別空襲は45年7月15日午前8時ごろから、米軍機約40機による銃爆撃で乳幼児を含む40人が死亡。管内最大の被害を受けた。

弾痕が残るタンスや、爆撃で折り重なり熱で溶けたガラスの塊など161点を展示。今回は空襲犠牲者の夫が経営していた「樋口農具製作所」で製造した「唐箕（とうみ）」（穀物とごみなどを選別する農具）を初めて公開。浦幌町立博物館が、同町の農家から寄贈を受け昨年度、同資料館に移管された。

田野館長は「戦禍の記憶を記録として残し、蓄積することで後世に伝え続けていくことが大切」と話す。

8月31日まで。午前9時～午後4時。月曜と祝日休館。入場無料。問い合わせは町図書館、電話0156・22・5112へ。

（大井一平）

北海道新聞
2023年（令和5年）8月21日（月曜日）

先祖の遺骨に慰霊の祈り

浦幌・アイヌ民族団体が儀式

祭壇のイナウにトノトを振りかけるラポロアイヌネイションの会員ら

【浦幌】町内のアイヌ民族団体「ラポロアイヌネイション」（旧浦幌アイヌ協会、会員12人）は20日、浜厚内生活館前で「カムイノミ・イチャルパ」を行い、先祖の遺骨に慰霊の祈りをささげた。井上亨町長ら関係者約40人が参列した。

カムイノミ（神へ祈る儀式）とイチャルパ（先祖供養の儀式）は2017年、北大から先祖の遺骨が返還されたのを機に始め、7回目。遺骨は東大、札医大なども返還し、現在、浦幌墓園に103体が眠っている。

この日は祭壇の前にいろりを設け、まずアイヌ語で祈りの開始を告げた。カムイノミは同団体の会員らがサパンペ（冠）をかぶって祈り、祭壇のイナウ（木幣）にトノト（神酒）を振りかけた。イチャルパには一般の参列者も加わり、菓子や果物を祭壇にまいた。この後、小雨の中、4人が「エムシリムセ（剣の舞）」を奉納した。

同団体の差間正樹会長（72）は「イチャルパを行うことで、返還された103体の遺骨の先祖に、私たちは守られているような気がする」と話した。また、浦幌町長が初めて参列したことについては「祈りを見守っていただき大変うれしい」と述べた。

（椎名宏智）

毎日新聞
2023年(令和5年)8月24日(木) 13版 北海道 22

「地域の歴史」記録

浦幌 3学芸員が活動報告

帯広百年記念館(帯広市)の大和田努学芸員(37)と北海道博物館(札幌市)の尾曲香織学芸員(36)、浦幌町立博物館の持田誠学芸員(50)が活動を報告する「歴史と民俗を記録する3話」が浦幌町内であった。それぞれの視点や手法で史実に向き合う3人が、地域史料を研究する意義と「調査の現在地」を熱く語った。

浦幌町立博物館講座として19日にあり、町民ら約50人が詰めかけた。今回の報告は、来年に発行する日本風俗史学会東北・北海道支部会報に掲載される予定という。

古文書などの文献史学を専門とする大和田学芸員は、翻刻された大正末期の浦幌町(当時は浦幌村)の学校関係公文書「教育雑件」を読み解き、現物の画像を映し出して村役場の文書処理の流れなどを克明に解説。古い文書を「文字起こし」する翻刻作業の意義にも触れ、「貴重な史料をどう生かすか模索していきたい」とした。

民俗学が専門の尾曲学芸員は「語られる感情も記録する」と題して、聞き取り調査の狙いなどを説明。現在、取り組んでいる道内の「行商」に関する聞き取り調査について報告し、「民俗資料を展示する博物館の存在意義の一つは過去との対話。感情や感覚まで展示することで、過去を生きた人を考えるきっかけがつくれる」と述べた。

道内で新型コロナウイルスの感染が拡大し始めた2020年2月、マスクの品薄を伝える店舗の張り紙や「マスクあります」と書かれた店頭ののぼりの写真をはじめ日常の様子がストレートに伝わる資料をいち早く収集し、全国的に注目を集めた持田学芸員は、地域の歴史や文化を後生に伝える資料を収集しており、保存の重要性を指摘。「モノだけでなく、それにまつわる話を集めて内容に厚みを持たせることが大切」と強調。多くの施設で収蔵庫が飽和状態にある現状も取り上げ、保存と廃棄の在り方を考える必要性を提起した。【鈴木斉】

(上)地域の歴史や文化を後生に伝える資料の保存の重要性を指摘する持田誠学芸員(下)大和田努学芸員(左)と尾曲香織学芸員=いずれも浦幌町で

北海道新聞

秋サケ遡上 神に感謝

浦幌のアイヌ民族団体

【浦幌】町内のアイヌ民族団体「ラポロアイヌネイション」（旧浦幌アイヌ協会、12人）は10日、秋サケの遡上（そじょう）を迎え、神に感謝の祈りをささげる伝統儀式「アシリチェプノミ」を浦幌十勝川の河口近くで行った。弁護士や支援者ら約40人が儀式を見守った。

2020年から続け、4回目。5本のイナウ（木幣）を立て、いろりを設け、知事が許可した「特別採捕」で捕ったサケを供え、会員らがカムイノミ（神へ祈る儀式）を行った。

特別採捕は北海道漁業調整規則に基づく漁。漁業権とは別に、知事は伝統儀式や漁法伝承などの目的であれば漁を認めることがあり、今年は浦幌十勝川でサケ・マス100匹以内の漁が許されている。ラポロアイヌネイションはこの日、この特別採捕に基づき49匹のサケを捕った。

一方、同団体は20年、国と道を相手に自由にサケが捕れる権利の確認訴訟を起こし、札幌地裁で審理が進んでいる。

儀式終了後、差間正樹会長（72）は「私たちは文化活動だけでは生活ができない。先祖が行ってきたように川で自由にサケを捕って収入を得たい」と話していた。

（椎名宏智）

「アシリチェプノミ」で感謝の祈りをささげた差間正樹会長（右から2人目）

伝統儀式など日弁連が視察

浦幌 権利保障へ現状確認

【浦幌】日本弁護士連合会（日弁連）のアイヌ民族権利回復プロジェクトチームの弁護士5人が9～11日、町内を訪れ、ラポロアイヌネイションの「アシリチェプノミ」や北大などから返還された遺骨が眠る浦幌墓園を視察した。

日弁連は昨年9月、旭川で開いた第64回人権擁護大会で「アイヌ民族の権利の保障を求める決議」を採択した。決議は、アイヌ民族のコタン固有の伝統を尊重し、漁労・狩猟・採集を行い、対象の動植物が生息・生育する環境を維持管理する権利や伝統儀式を行う文化的精神的権利を認め、保障するよう国と道に求めることを明記している。

今回の視察は、この決議を踏まえ、ラポロアイヌネイションの現状を確認することなどが目的。日弁連公害対策・環境保全委員会内に設置された同チームの弁護士が全国から集まった。

東京から参加した小島延夫弁護士は取材に「アシリチェプノミのようなアイヌ民族の伝統的、基本的儀式でさえ、長年の中断があったということに状況の深刻さを感じる。私たちはアイヌ民族当事者の声をもっと現場で聞き、認識を深める必要があると思う」と話した。

（椎名宏智）

返還されたアイヌ民族の遺骨103体が眠る墓を視察する日弁連の弁護士ら

十勝毎日新聞
2023年(令和5年)9月15日 (金曜日)(14)

十勝川下流含む 道東の湿原紹介

町立博物館企画展

【浦幌】湿原と人々の関わりなどを考える浦幌町立博物館の企画展「道東の湿原」(釧路市立博物館協力)が、同館特別展示ホールで開かれている。釧路市立博物館で開催された「湿原の王国～道東～」の移動展。浦幌町立博物館独自の資料も追加されている。18日まで。

十勝川下流域一帯は環境省の「日本の重要な湿地」に指定されている。町内のヌタベット湿原や十勝海岸湿原群のほか、釧路湿原、霧多布湿原などをパネル17枚で紹介している。

道東の湿原を紹介する企画展

湿原を代表する植物ヤチボウズの断面や釧路市立博物館ブックレット「湿原の妖怪?ヤチボウズ」、十勝自然保護協会のシンポジウム記録集「十勝海岸の自然を考える～湿地・湖沼・海岸線の現状と将来～」なども展示されている。

同館の持田誠学芸員は「湿原は二酸化炭素をため込むなどの機能がある。残り少なくなった十勝の湿原を守る取り組みを知ってほしい」と話している。

(円子紳一通信員)

十勝毎日新聞
2023年(令和5年)9月19日(火曜日)(14)

抜いたぞオオアワダチソウ

豊北海岸外来種 博物館が初企画 2時間で30袋

【浦幌・豊頃】浦幌町立博物館が主催する博物館講座「オオアワダチソウをどんどん抜くぞ!」が浦幌、豊頃両町に広がる豊北海岸で行われ、町内外から15人が参加した。抜き取り作業は原生花園の植生保全が目的で、今回初めて開催された。

オオアワダチソウを抜き取る参加者ら

オオアワダチソウは高さ1メートルを超える多年草で、種子繁殖のほか、長い地下茎を伸ばして群生する。北アメリカ原産の外来種で、明治時代中期に観賞用として日本に持ち込まれ、全国に分布している。道内では近似種セイタカアワダチソウより繁茂している。

講座は3日に開かれ、同館の持田誠学芸員が、オオアワダチソウは鉄道の延伸とともに広がったこと、海岸の植生に影響を及ぼすことなどを説明。参加者は海岸に群生するオオアワダチソウをスコップなどで根こそぎ抜き取った。約2時間の作業で45リットル入り30袋分を抜き取った。

同館の豊北植物調査会「モニタリングサイト1000里地調査」に参加している豊頃町の池田守さん(72)は「思った以上に根が張っていて大変だった。根が残っているので来年も心配」と語り、持田学芸員は「毎年、抜き取りを続ける」と話していた。

(円子紳一通信員)

大正神社にヒカリゴケ

物置小屋の縁の下に準絶滅危惧種

宮司「維持したい」

発見の玉井さん「確認うれしい」

帯広市内の大正神社（筒井洋一宮司）境内で、物置に使用している木造小屋の縁の下に、環境省のレッドリスト（絶滅の恐れがある動植物リスト）で準絶滅危惧種に指定されているコケの一種「ヒカリゴケ」が群生しているのを、同市内の玉井孝明さん（75）が発見した。浦幌町立博物館の持田誠学芸員（50）によると、ヒカリゴケは古いトンネルや洞窟に生えることが多く、こうした建造物の縁の下に生えるのは特に珍しいという。（山田夏航）

「何か緑色に光っているな」―。玉井さんがヒカリゴケの存在に気付いたのは2021年5月ごろだった。趣味の野鳥やキノコ観察のため、同神社を訪れた玉井さんは、小屋の縁の下で偶然、幅、奥行き各2㍍ほどの範囲に所々生えているヒカリゴケを見つけた。

筒井宮司（55）によると、小屋は少なくとも築50年以上経過しており、老朽化も進んでいることから、取り壊す予定だったという。

ただ、玉井さんから珍しいヒカリゴケの可能性があるとして、専門家への調査を強く頼まれた筒井宮司は「生息環境を崩すわけにもいかない」と取り壊しを中止。10年に新得町内の旧国鉄狩勝線・新内トンネルで見つかったヒカリゴケを同定した経歴のある、持田学芸員に調査を依頼した。

持田学芸員は同神社で採取したコケを持ち帰って調べると、日光に当たると表面を緑色に光らせるレンズ状細胞などの特徴が確認できたことから、15日にヒカリゴケと確認。「十勝管内ではこれまで新得、本別、幕別、足寄で見つかっていて、帯広では初めてではないか」と話す。また、群生した理由については「付近で水が湧いており、地面が湿り日光も当たりづらいことから、生息に適した環境になった」と考えられる。

正式にヒカリゴケだったと持田学芸員から聞いた玉井さんは「本当にうれしい。好奇心を持って観察した結果じゃないかな」と喜びを表した。筒井宮司は「比較的、市民が訪れやすい場所にヒカリゴケがあるのはあまりないと思うので、維持していきたい」と力を込め、「参拝時にはマナーを守って見てくれたらいい」と話している。

小屋の縁の下で見つかったヒカリゴケ

ヒカリゴケが生えている境内の小屋。（右から）発見者の玉井さん、筒井宮司

「客車コハ23号」往年の色に

市の指定文化財 十勝鉄道が修復

濃いこげ茶色「後世に正しい形で」

日本甜菜製糖の子会社・十勝鉄道（帯広）は、帯広市西7南20の遊歩道に常設展示している市指定文化財「客車コハ23号」の車体を濃いこげ茶色に塗り直し、往年の姿に復元した。使われていた当時を知る人が減っている中、十勝鉄道に詳しい学芸員は文化財伝承の観点から「後世により正しい形で伝えることができる」と修復の意義を語る。

濃いこげ茶色「ぶどう色2号」に塗られた十勝鉄道の「客車コハ23号」

十勝鉄道は砂糖の原料になるビートを工場に運ぶため、北海道製糖（現日本甜菜製糖）の専用鉄道として1920年（大正9年）に開通。23年（大正12年）には旅客輸送も始まったが、自動車輸送の発達により59年には旅客輸送から撤退。77年に貨物営業も廃止し、2012年には鉄道運行から完全に撤退した。

客車コハ23号の復元は、十勝鉄道の創立100周年記念事業の一環。浦幌町立博物館の持田誠学芸員、帯広百年記念館の大和田努学芸員らが残された文書や図面、同じ年代に製造された客車を調べ、塗装がはげた部分を確認して8月下旬に色を塗った。老朽化が進む床板の補強や線路への砂利の補充も行った。

客車コハ23号は1926年製で18人乗りの木造客車。紫がかった小豆色に塗られていたが、残っている写真はモノクロが多いため、当時を知る高齢の市民から「色が違う」と指摘されることもあったという。

近年、米国出身の鉄道写真家が59年に撮影したカラー写真で、濃いこげ茶色だったことが判明。再現しやすく、色が近い国鉄の「ぶどう色2号」に塗装した。客車側面に書かれた十勝鉄道のマークや「コハ23」の文字も当時により近い字体で書き直した。

市教育委員会が今月8日にお披露目した際は市民が訪れ、帯広・明星小2年の田所和青さん(7)は「塗り直した濃いこげ茶色もかっこいい」と話した。

持田学芸員は「十勝鉄道の機関車と客車は大切に保存され、希少性が高い。当時に近い姿に復元し、後世に継承することには意味がある。今後も一般公開などを通じ、眠っている資料の発掘に努めたい」と話した。

（古谷育世）

十勝毎日新聞
2023年(令和5年)11月8日(水曜日) (14)

初めてのハクガンに感動

浦幌 秋の渡り鳥1000羽観察

渡り鳥を観察する参加者

【浦幌】浦幌町立博物館の移動講座「秋の渡り鳥観察会」が3日、町下浦幌地区で開かれた。町内の野鳥愛好家の春日基江さんを案内役に招き、越冬地の本州各地に南下する渡り鳥を観察した。町内外から13人が参加した。

国道336号沿いにある収穫後の飼料用トウモロコシ畑で、ハクガン、シジュウカラガン、マガン、ヒシクイ、オオハクチョウなど1000羽ほどを観察した。ハクガンの群れの中には、緑色の首輪をした個体やアオハクガン2羽の姿もあった。

参加者らは「アオハクガンが肉眼で見られてすごくよかった」「シジュウカラガンが間近だった」と感激していた。浦幌町の祖母と参加した関井透季(とうい)ちゃん(6)＝帯広市＝は「初めてハクガンを見て楽しかった」と喜んでいた。案内した春日さんは「1カ所で渡り鳥全種類を見られてよかった」と話していた。

(円子紳一通信員)

十勝毎日新聞
2023年(令和5年)11月9日(木曜日) (14)

化石や流木を教員らが視察

高等学校理科研究会

オオアワダチソウの抜き取り現場で説明する持田学芸員(右)

【浦幌】北海道高等学校理科研究会十勝支部の生物部会は浦幌町立博物館や同町内の豊北海岸などで、地域の自然環境を学び授業に反映させるための研修会を開いた。

10月17日に開かれ、教職員4人が参加した。同博物館の持田誠学芸員が講師を務めた。同館学芸員室で、町留真で最初に発見されたウラホロイチゲ(キンポウゲ科)や、恐竜が絶滅したとされるK/pg境界(町川流布)の直下で見つかった十勝初のアンモナイト化石などが紹介されていた。

豊北海岸では、漂着した流木の処理状況や、外来種のオオアワダチソウの抜き取り処理、ハマナスやコケモモ、ガンコウランなどの海岸植生を観察した。ワタスゲ群落があるヌタベット湿原やコハマギクが咲いている昆布刈石なども訪れた。

持田学芸員は「浦幌町は高校がなくなり、博物館と高校の接点が少なくなっているので、管内高校の理科教育に活用していってほしい」と話した。

(円子紳一通信員)

フレッシュアップのお手伝い
サンドライ
帯広市西5条4☎25-5252

十勝毎日新聞
2023年(令和5年)11月10日(金曜日)(14)

十勝最初の駅や寺 厚内の文化財巡る

【浦幌】浦幌町立博物館(佐藤亘館長)の「厚内文化財めぐり」が10月21日、JR厚内駅前に集合して開かれた。町内外から11人が参加。同館の持田誠学芸員が案内役を務めた。

一行は、1903(明治36)年に十勝で最初に開業した厚内駅、45(昭和20)年の厚内空襲で機銃掃射を受けた太子寺、町の有形文化財に指定されている絵馬が残る厚内神社、国指定の史跡「オタフンベチャシ跡」などを訪ねた。

開業120周年となる厚内駅では、厚内空襲で蒸気機関車が攻撃されたことなどを聞き、1903年建設の洋館「旧斉藤牧場事務所」も訪ねた=写真。

アイヌの戦いの伝説が残るオタフンベチャシ跡は、海岸が直前まで迫り、道道の移設工事が行われていた。

小中学校時代を浦幌で過ごし、今回母親と参加した白石雅志さん(61)=帯広市=は「斉藤牧場の事務所は文化的な香りがするのでぜひ保存して活用できるといい」と話していた。

(円子紳一通信員)

新聞定価　月ぎめ本体価格3,056円（税込み3,300円）1部売り150円（税込み）　第3種郵便物認可

Mottoかちまい　防災 BOSAI

災害伝承 ① 地図に刻む

「碑」を記号化 全国2037基

過去の自然災害を記録した記念碑の位置を表示して防災意識と高めようと、国土地理院が2019年から新たに採用した地図記号が「自然災害伝承碑」だ。伝承碑は洪水や津波の被害を記録した石碑が多く、今年10月時点で全国584市区町村の2037基が掲載対象になっている。北海道は全国的にみて伝承碑の数が少ない地域で、十勝管内では浦幌町内の2基にとどまっている。（藤家秀一）

活平地区にある浦幌川流域災害復旧記念碑と持田学芸員

十勝は浦幌に2基のみ

自然災害伝承碑は広島県などに大きな被害をもたらした18年の「平成30年7月豪雨」（西日本豪雨）をきっかけにつくられた。洪水や津波などが起きた地域では過去にも同じような災害を経験している例が多いことから、市町村からの情報提供に基づいて地域の災害の様子を記録した石碑などを地図上に表示することにした。

二つの洪水伝える

浦幌町の自然災害伝承碑を実際に訪ねてみた。2基はいずれも洪水被害の災害復旧碑で、過去に何度も氾濫した浦幌川流域にある。伝承碑の調査に携わった浦幌町立博物館の持田誠学芸員が「浦幌川は狭い谷あいを蛇行して流れていたため洪水が多く、河川改修を繰り返してきた歴史がある」と教えてくれた。

伝承碑の一つ「浦幌川流域災害復旧記念碑」は、町の中心部から浦幌川を20㍍ほどさかのぼった活平地区にある。地区では1988年11月の豪雨で浦幌川が氾濫・決壊した結果、家屋34戸が浸水して192㌶の農地が流出。記念碑は災害後に実施した災害復旧工事や河川改修工事の完成を記念したもので、92億円の総事業費を費やしたことが記されている。

もう一つの「浦幌川災害復旧改修記念碑」は、最初の碑より下流の常室地区にある。こちらは1975年5月の大雨被害の災害復旧碑で、家屋浸水90戸と農地1250㌶流出の被害を伝えている。

常室地区にある浦幌川災害復旧改修記念碑

道内は計38カ所

国土地理院北海道事業測量部によると、今年10月現在で北海道内の伝承碑は計38カ所。「開拓が始まる近代以前はアイヌをはじめとする先住民が暮らす地域だったため、文字記録が少ないことが影響している」と指摘する。

地図に掲載する伝承碑は地理院がホームページ＝QRコード＝で公開しており、更新するたびに新たな情報を加えている。

地理院の担当者は「全国的に自然災害が頻発するようになり、伝承碑の価値について周知が進んできた。今後も地図への掲載を充実していきたい」と話している。

自然災害伝承碑の場所を載せた地図。本州などに比べて道内は設置数が少ない（国土地理院のホームページより）

巨大地震の備え 事例学ぶシンポ

開発局が7日

国土交通省北海道開発局は12月7日、十勝地方の巨大地震や津波への対策をテーマにした「防災・減災シンポジウム」を帯広市のとかちプラザで開く。当日は地域ごとの地震・津波対策の事例を紹介するほか、専門家による講演もある。参加無料で、オンライン視聴を含めた参加者を募集している。

シンポは午後2時～同5時にあり、第1部として日本海溝・千島海溝沿いの巨大地震や、地震時の津波警報・注意報について情報提供がある。続く第2部では巨大地震への対応について、日本災害情報学会会長で東京大大学院特任教授の片田敏孝さんが講演する。

シンポは広尾、豊頃両町に設ける別会場に加え、ズームでもオンライン視聴ができる。定員は帯広会場150人、広尾、豊頃会場各30人、ズーム200人で専用フォーム＝QRコード＝から応募する。

問い合わせは北海道開発技術センター内の事務局（011・738・3364）へ。

電子版に関連記事

北海道新聞
2023年（令和5年）12月12日（火曜日）

刈り取り後、ランの仲間増えた

外来種駆除で森再生

浦幌 帯畜大特任助教が講演

【浦幌】外来種のオオアワダチソウを駆除した場合、どのような効果が現れるか。帯広市の都市公園「帯広の森」で行った試みについて、帯広畜産大特任助教の宮崎直美さんが町立博物館で講演し、「刈り取り続けた森には、ランの仲間が多く見られるようになった」と報告した。

講演する帯広畜産大特任助教の宮崎直美さん

帯広の森の植樹後約25年の広葉樹林で、オオアワダチソウが繁茂する場所と、市民が10年以上刈り取り作業を続けてきた場所を比較し、調べたという。

この結果、刈り取り作業を行っている林床は、オオアワダチソウの生育量を5分の1に抑えることに成功し、クモキリソウ、サイハイラン、ササバギンランなどランの仲間が目立つようになったという。

宮崎さんは「帯広の森でオオアワダチソウを刈り取ることは、外来種を抑えることに大きな効果があると言える。また、元々ここにあった郷土種主体の森に、植生を変えることにもつながっている」と話した。

この講演は町立博物館の主催。演題は「人が育てる森をしらべる」で2日に開かれ、20人が聴講した。

（椎名宏智）

北海道新聞
2023年（令和5年）12月13日（水曜日）

先住権侵害に「共闘宣言」

浦幌のアイヌ民族団体、海外の民族と

来月 帯広で表明

【浦幌】十勝管内浦幌町のアイヌ民族団体「ラポロアイヌネイション」（旧浦幌アイヌ協会）は、台湾やカナダなどの先住民ら8人と共同で、先住権が不当に侵害されないよう連携して闘うとする「2023ラポロ宣言」をとりまとめた。複数の先住民による宣言の策定は異例。来年1月27日、帯広市で開く集会で報告する。

宣言は9項目で、主な内容は①先住民の先住権は法律による権利ではなく、伝統や慣習に基づく各集団固有の権利②国は先住民の自然資源の利用に当たり、非先住民に妨げられないようにしなければならない③国は資源保護を理由に先住民の各集団固有の権利を奪うことができない―など。

その上で「私たちは固有の権利が不当に侵害されぬよう情報を共有し、連帯するネットワークを形成して、連携して闘っていくことを誓う。この闘いを世界に広げていくことを宣言する」などと記した。

宣言は、浦幌町で今年5月に開かれた国際シンポジウム「先住権としての川でサケを獲る権利」を主催したラポロアイヌネイションと、海外から参加した計7民族などの8個人が連名で作成した。半年にわたって宣言文を練り、11月末、日本語版のほか英語と中国語を作成した。

ラポロアイヌネイションによる先住権確認訴訟（札幌地裁で審理中）で原告弁護団長を務める市川守弘弁護士によると、世界の先住民や原住民が共同でこうした宣言を表明するのは前例がないという。

市川弁護士は「世界の先住民や原住民は、自分の国に先住権保護の法律があったとしても、資源枯渇や自然保護などを理由に権利が保障されず闘っている。そうした先住民や原住民主体の宣言で、実践的な内容となった」と話している。宣言文はラポロアイヌネイションのホームページ（http://raporo-ainu-nation.com）で読むことができる。

（椎名宏智）

5月の国際シンポジウムでラポロアイヌネイションのメンバーと踊る海外の先住民ら（加藤哲朗撮影）

浦幌駅120周年 歴史回顧

1903年12月25日開業

構内に年表や史跡図

【浦幌】1903(明治36)年12月25日に音別(現釧路市)―浦幌間の鉄道が開業した。この時、十勝で初めて営業を始めた駅が、現在のJR浦幌駅と厚内駅だ。浦幌町立博物館(佐藤亘館長)は、これら2駅に開業120周年を祝う掲示を行い、節目の年を祝っている。また、浦幌町出身者がキャンドルを配って祝意を示すなど、町内では祝賀ムードが広がっている。(吉良敦)

開業120年を記念したポスターなどが掲示されているJR浦幌駅の待合室

鉄路は04年に利別駅(池田町)まで延び、05年10月21日には帯広駅が開業し、釧路と帯広がつながった。

同博物館は浦幌駅構内の待合室でポスター、写真各4枚と年表、鉄路と付近の史跡・自然案内図を展示している。ポスターは「十勝の鉄道史」「十勝河口都市の夢」「鉄道忌避伝説の誕生」などで、鉄路が決まるまでの経緯などを紹介。同博物館の持田誠学芸員は「開業記念日でもあり、鉄道のルートがどのようにして決まったのかという観点でポスターを選んだ」と説明する。

写真は「鉛筆工場からの出荷」「行商と鉄道郵便」ほか、ヒオウ丁浦幌

改めて伝えている。持田学芸員は「町のルーツとも関わる鉄道の歴史を知ってほしい」と来場を呼び掛けている。

同博物館は来年2月23日～4月20日に「十勝の鉄道120年」を開催する予定で、鉄道に関する思い出を集めている。連絡先は同博物館(015・576・2009)へ。

十勝毎日新聞
(15) 2023年(令和5年)12月26日(火曜日)

駅開業120年 鉄路思いはせ

管内最古 浦幌・厚内で式典

【浦幌】十勝管内最初の鉄道駅となったJRの浦幌駅と厚内駅は25日、開業から120周年を迎えた。正午すぎから浦幌駅で記念式典が開かれ、井上亨町長が浦幌駅の山信田(やましだ)亮駅長に花束を贈り、節目の年を祝福した。

1903(明治36)年12月25日に音別(現釧路市)―浦幌間の鉄道(北海道官設鉄道釧路線)が開通し、浦幌、厚内両駅が開業。04年に利別(池田町)、05年に帯広へと延伸した。

この日は井上町長、森秀幸町議会議長、竹田悦郎町商工会長ら15人が、町のバスで音別に移動し、JRに乗り換え、音別―浦幌間を視察乗車した。正午に浦幌駅に着き、駅構内で町立博物館が主催する記念式典を開催した。参加した約20人を前に井上町長は「120年前の鉄道敷設には、信じられないほど大変な苦労があったと思う」と視察を振り返り、「駅がなければ今の浦幌はない。行政として駅利用者の拡大を図っていかなければ」と述べた。JR北海道の戸川達雄釧路支社長は「120年間列車を走らせ続け、多くの方にご利用いただけるよう努力してきたことを後進にも伝えていきたい」とあいさつした。

お祝いの花束を贈った井上町長(右)と受け取った山信田駅長

駅待合室で来年1月28日まで展示するポスターを使って同博物館の持田誠学芸員が、鉄道ルート選定の経緯やその後の町の歴史などを紹介した。

視察乗車に参加した一般社団法人「十勝うらほろ樂舎」の浅野佳奈さん(29)=茨城県出身=は、旅行会社から同法人に出向中。「昔からあるトンネルやレンガ倉庫が今も使われていて、歴史を感じるとともに保存することも考えていく必要があると思った」と話していた。

(吉良敦)